第 58 回 日本生殖医学会
2013.11.15-16. 兵庫

精子死滅症例は高度乏精子症例に比べ精巣内精子回収法によって治療成績が向上する

大住　哉子, 谷口　久哲, 赤松　芳恵, 佐藤　学, 橋本　周、
中岡　義晴, 森本　義晴

【目的】当院では、運動精子が非常に稀少で顕微授精（ICSI）に用いるには困難だと判断された高度乏精子症の場合や、精子死滅症の場合、精巣内精子を用いた治療を行う。今回、高度乏精子症と精子死滅症で精巣内精子を用いて治療を行った症例について臨床成績を比較した。【対象と方法】2004 年 10 月から 2011 年 12 月までに精液検査にて精子が認められながらも精巣内精子回収法（TESE）を行った 26 症例を対象とした。射出精液中に稀少な運動精子が存在した高度乏精子症例（＋群, 12 症例）と、射出精液中に不動精子のみが存在した精子死滅症例（－群, 14 症例）に分けて検討を行った。【結果】TESE 実施時の夫平均年齢、FSH 値、精子回収率は＋群（37.2 歳, 14.4mIU/ml, 83.3%）、－群（38.4 歳, 24.6mIU/ml, 87.5%）でそれぞれに差は認められなかった。また、TESE にて回収した精巣組織内から運動精子（奇形形態も含む）が 50 匹以上確認できた症例は＋群 1 症例（10%）、－群 10 症例（71.4%）で－群で有意に多かった（P<0.05）。さらに TESE 精子を用いて＋群 8 症例、－群 14 症例に ICSI、胚移植（ET）を行ったところ、採卵時妻平均年齢、受精率、ET あたりの妊娠率、ET あたりの出産率、症例あたりの出産率は＋群（35.2 歳, 32.8%, 37.5%, 25.0%, 25.0%）、－群（35.6 歳, 47.2%, 50.0%, 42.3%, 78.6%）で、症例あたりの出産率が－群で有意に高かった（P<0.05）。【考察】精子死滅症の場合 TESE にて十分な運動精子が獲得でき、児を得られる可能性が高い。一方、高度乏精子症の場合、TESE を行っても十分な精子が獲得できるとは限らず明らかな改善が得られない傾向にあった。